北越雪譜　初編　人

ル 4
328
3

呂門 號 328 巻 3

北越雪譜初編巻之下

目録

渋海川さかべつとう 唄上下につゞく

鮭の字考

鮭の食用

鮭を出す所 並 鮭の始終

鮭を捕る打切 並ニ図

撥網

漁夫の溺死

千曲川の総滝

鮭魚の類術

鮭の洲走り

人家の垂氷

笈掛岩の氷柱

滝の氷柱

雪中の寒行

寒行の威徳

雪中の幽霊

関山村の毛塚

雪中鹿を追ふ

泊り山の大猫

山言語

童の雪遊び
雪に座頭を降せ
通計二十三條

越後奇跡録 五巻 近刻

鈴木牧之編撰
京山人百樹刪定

此書は越後七不思議の細説并に圖、名所旧跡の實跡并圖、國中温泉の圖并に主治、山川勝景の圖説、近古人物名誉の傳持の餘、種々の奇談、其地を踏て其事を見るがごとくに記したる假字文の書なり

京水百鶴画圖

于此紙葉の餘地在り、空しく過ぐるを以て古の書名を標して大方の諸君に報じ、刻に先んずるの好評を祈る

書肆 文溪堂 謹識

北越雪譜初編 巻之下

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○渋海川さかべつかう

我国の俚言に蝶をべつかうといふ。渋海川のほとりにてはさかべつかうといふ。蝶は諸の虫の羽化する所にて、大なるを蝶といひ、小なるを蛾といふ（本艸）。其種類さまざま多し。草花も蝶に化する事本草にも見えたり。蝶の和訓をかはひらこといふは新撰字鏡にも見えたれど、さかべつかうといふ名義は未考ず。さて前にいへる渋海川にて春の彼岸の頃、幾百万の白蝶水面より二三尺をさるほどに羽もきしあふばかり群る。が高さは一丈あまり、両岸を限りとして川下より川上の方へ飛行、その形状花のふゞきとみえ、それは幾里ともなく流に霞をひきたるがごとく、朝より夕べまで悉く川上へつゞきたるがそのかぎりをしらず、川水もみえざるほどなり。さて日も暮なんとするに

いとおびたゞしく水面にみちわたりて流れくだるさま白布をさらすがごとし其蝶の形ハ
燈蛾などにて白蝶也我国に大小の川〻幾流もあれどもひとり此浩海川にのみくだりて
毎年かくのごとし此事あるも奇とすべしさるに天明の洪水以来此事絶てなし
○本草を按るに石蚕一名を沙虱といふもの山川の石上に附て繭をなし春夏羽
化して小蛾となり水上に飛ぶといへり件のさなぎなどハ浩海川の石蚕なるべし其
種を洪水に流し尽したるゆゑたえたるなるべし他国にも石蚕を生ずる川あらバ此蝶
あらんもしるべからず余此蝶をみざりしゆゑ近隣の老婦若きころ浩海川の辺りより
嫁せし人ありしゆゑ尋問ひしにその老婦の語りしまゝをこゝに記せり

○鮭の字の考

新撰字鏡といふ字書ハ本朝の僧昌住といひし人今より九百四十年あまり
のむかし寛平昌泰の年間作りたる文字の吟味をしたる書にしてより世の
学匠たち傳へ写して重宝せられきしかるを近き頃村田春海大人右の書を
京都にて購得てのち享和三年の春創て板本となし世の重宝となりて
より后の学者の机上に置ハ實に春海大人の賜なりけり右の字鏡ありて
后二十余年を歴て源の順朝臣の作りたる和名類聚抄ありき是も字書之
元和の年間那波道円先生創て板本とせられしより（後の板もあり）さて和名抄ありて
后五百年ちかくをへて文安年中下学集といふ字書ありきこれも元和三年
創て板本となりしより下学集より五十三年の后明應五年林宗二（堺の町人）節用
集を作り文亀のころの活字本ありしこれハ引節用集の権輿也其后
百八十年を歴て元禄十一年に槙島昭武駒谷山人が作りたる（江戸の人）書言字考
一名合類節用集といふ板本あり宗二が節用集を大成したる物にていろは引
之（平他字類抄のるゐ下に引用せざるものハこゝにあげず）本朝の字書のるゐ大抵ハ件のごとしさてハ今俗用せる
節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母として后のハ皆其子孫也是ハ鮭の字
の事を言んとてまづ童蒙の為に先いふなりけり○新撰字鏡魚の部に鮭（佐介）

とあり和名抄にハ本字ハ鮏俗に鮭の字を用ゆるハ非といへりされバ鮭の字を用ひしも古し同書に崔禹錫が食経を引て「鮏其子苺に似て赤く光り春生まれて年の内に死ぬ故にまた年魚と名く」とみえたり新撰字鏡に鮭の字を出しハ鮏と鮭と字の相似たるを以て傳写の誤りを傳へしもあるべけれど鮭ハ河豚の事なるをや下学集にも鮭干鮭と並べ出せり宗二が文亀本の節用集にも塩引干鮭となるべしとせりしとあるも鮏と鮭と傳写のあやまりにや駒谷山人が書言字考にハ○鱖○石桂魚○水豚○鮭と出して注に和名抄を引て本字ハ鮏とあり大典和尚の学語編にハ鱖の字を出されて鱖をあさぢト訓じ唐の字書にハ鱖ハ大口細鱗とあれバ鮭になぞらへるなるらん字彙にハ鮭ハ鮏の本字にて魚臭とすとあり按るに鮭の鮮鱗ハことさらに魚臭きものなれバにやあらん鮭ハ鯸鮐の一名ともいへバ鮭にハいよいよ遠しことにまれかくまれ鮭の字を知りて俗用にハ鮭の字を用ゆべし件の如く

鮏の字も古く用ひきたれバいかにも和文章にも鮭の字を用ゆべし 鮏の字ハ音くハ通じ難しとてにハ姑く鮭に從ふ

○鮭の食用

腥にて喰するハ○魚軒○鱠○鮓之○烹る○炙その料理によりて猶あるべし醃にきたるを塩引また干鮭といひしも古き事ハまへに引る書に見えたるがごとし延喜式にのせたる内子鮭ハ今いふ子籠り鮭の事なるべし又同書に脊腸をせのわたト訓り丹後信濃越中越後より貢とせる事もみえたれバ古代ハ鮭を供御にも奉りたるなるべし都へ遠きよりきたるなれバ塩引なるらん頭骨の澄徹ところを氷頭とて鱠に作之子を鮞といへるをも醃にきたるも美味之子あるまゝを塩引にきたるを子籠りといふ古へのまゝなりトいひしも是なるらん本草に鮭味ひ甘く微温毒なし主治中を温め氣を壮にするを多く喰へバ痰を發すといへり我国にて塩引にきたるを大晦日の

節には用ひざる家あり又病人にも喰せ他国にて腫物にいむものハことにならざ
るゆゑにやあらん

○鮭を出す所

鮭ハ今五畿内西国にてハ出す所を聞ず東北の大河の海に通ずるにハ鮭あり
松前蝦夷地最多し塩引として諸国へ通商ハ此地に限る次にハ我が越後
に多し又信濃越中出羽陸奥の常陸にもありときこゆこれらの国の鮭ハ
その所の食にあつるに足るのミ通商するにいたらず江戸ハ利根川にありと
いへども稀なるゆゑ初鮭ハ初鰹の價に比すとぞ我国にてハ毎年七月二十七日
所々にある諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をはじめ十二月寒のあけるを漁
の終りとす古志の長岡奥沼の川口にありて漁しける一番の初鮭を漁
師長岡へたてまつれバ例として鮭一頭に一頭を一尺と定め米七俵の價を賜ふ奥をそんまでなり
たてまつるさけにハ寸尺の定めあり俵の数も下る 鮭の大なるハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸と稀に小なるもあるべし

男魚女魚の名ありめすハ子あるゆゑをすよりハ價貴し五番まで奉りて
后を賣る初鮭の貴きことおしてしるべしことを賞する江戸の初鰹魚
におとらずとぞ初鮭ハ光り銀のごとくにして微青をおび肉の色紅をぬ
りたるが如し仲冬の頃にいたれバ身に斑の錆いで肉も紅ゐ薄し味もやゝ劣
れり此国にて川口長岡のあたりを流るゝ川にて捕りたるを上品とす味ひ他
に比すれバ十倍の僅に其地を去れバ味ひ美ならずその味ひ美なるものハ北海
より長江を泝りて困苦する度にあぶらぬけるゆゑなるらん奥急浪に困苦バ味
ひかるゝぞ其美ものゝ北海の奥の味ひ厚と南海の奥の味ひ淡の差ひある
がごとし

○鮭の始終

我国の鮭ハ初秋より北海を出て千曲川と阿加川の両大河に泝ること
其子を産んとて也女魚に男魚随てのぼる泝る事およそ五十余里河に在

澁海川奇蝶之圖

事、およそ五月あまりにしてその間に八九十十一十二月人に捕るゝをまぬがるゝハ海へ皈る故に大
小ありて子を産つける所ハかならず心ありて一定ならざれども千曲と魚野の両
河の合する川口といふより沙に小石のまじる処よりをかのものが産所とし流
きの絶急ならぬ清き流水の所に産んとて鮏の捨く群るを漁師のお
しづに掘につくざまにつくともいふ（沙をわるにさぐのくちをするをゆゑざまとのざまなりん）女魚男魚ともに
尾をもて水中の沙を掘るその廣さ一尺あまり深さ七八寸長さ一丈あまり數日
にしてこれを作るつくりをはれバ女魚そのなかへ鮞を一粒づゝ産むをみれバ
男魚己が白鮞を彈着直に女魚男魚掘のけたる沙石を左右より尾鰭にて
よくひらけて鮞を埋む一粒も流さぬ事をせんさて此一掘に産をはれバ又そこに
並て掘りてハ産うミてハ掘り幾條もならべ掘りて終に八九尺四方の沙中へ行列
よく腹の子をのこさず産をふる或ハ所を替ても産とぞ沙に小礫の交りたる
所にあらざれバ産ずと漁師がいへりその所爲人の智にをさ〳〵おとらざるぞ

産終るまでの困苦のゆゑに尾鰭を損ひ身瘦労れなかばに去てやゝくだり
深淵ある所にいたりてしバらくに沈居て労を養ひもとのごとく肥太りて再び流
に泝る掘につきたる時ハ漁師もこれをとらバなく捕るものあれども強て八
せぬなりと女魚さへとらざれバ男魚ハ其所をさらぞ鮭の河に泝るハ子を産んと
てなりその女魚に男魚随てのがるハ子の為に女魚を助るならんとも又人の
心にたとふるべきさて奇なる事ハ河の廣き場にてかれ鮞を産おきてたる所洪水など
にて瀬かはりて河原となりしが幾とせもちても産たる子腐ずふたゝび瀬となれバ
その子生化して鮭となる一年我が住む所の在ゆく魚野川のほとりに住む人
井を掘しに鮞の腥なるをありいでしことありしと友人がかたりし鮞の生化せる
を漁師のことばにちやけるともこまけるともいふ（早化の身ヨ化るなり）鮞水にある事十四
五日にして魚となる形ち糸の如くさけ一二寸腹裂て腸をもさぎゆゑに佐以の名
ありといひ傳ふ春にいたれバ長じて三寸あまりになる事をべからずも捕らぬ事

とも此子鮭雪消の水に随ひて海に入る海に入りてのち裂る腹合して腸をなすと漁父がいへり前にもいへる如く鮭の漁は寒中を限りとも寒あけて捕れバ祟をなすといひつたふ我が若かりし時水村の一農夫寒あけて后禰のとりたる鮭を奪ひとりてを喰ひしく熱になやみ三日にして死たる事ありされバたゝりあるといふ口碑の説も誣べからず又かれが産おきたるたまごをとりたれバその家断絶せしといひ伝ふ鮭の大なるは三尺四五寸にあまるもあり是は年々網を脱れて長じたるなるべし我が若年のころは鮭あまたとれたる故其の価もいやしかりしが近年は捕る事少き故価もおのづから昔しに倍せり年々工を新にして漁する故捕減したるなるべし女魚の大なる腹には鮞一升もあり小なるは三四合にもすぎず江戸に多く出てあつかふ塩引と唱ものは鯵鮭とて越後の鮭とは一品別種なる物なりと或物産家のいへり河に生れて海に成長すれどもむかしより海中く網に入らる事なし其始終をおもふに鮭は鱗族の奇魚といふべし

牧之常におもへらく寒気の頃捕る鮞と男魚の白鱁とをまじへ鮭居る川の沙石に包み瓶中のものにうつし入れ鮭なき国の海に通ずる山川の清流にかの瓶にうつしたるたまごを沙石のまゝさけのうをつけたる如くになし然ば此川にて鮭いでくとも三年捕る事を国禁あらば鮭を生ぜんもあるべからず生ぜば国益ともなるべし（江戸の白魚ハむかしそのたねをうつしたりとぞきこゆる京にもあるべし）

○打切り並にで

北海新潟の海門におつる大河を阿加川と千曲川とをいふ（阿加川のすゑはちくまにいるなり千曲川一名を信濃川ともいふ限の字をも用ふ）千曲川の水源は信濃越後飛騨の大小の川々あまた流れを併て此大河をなすこゝ越後は妻有上田の二庄をながるゝ魚野川の急流をなし魚沼郡藪上の庄川口駅の端にいたりて信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

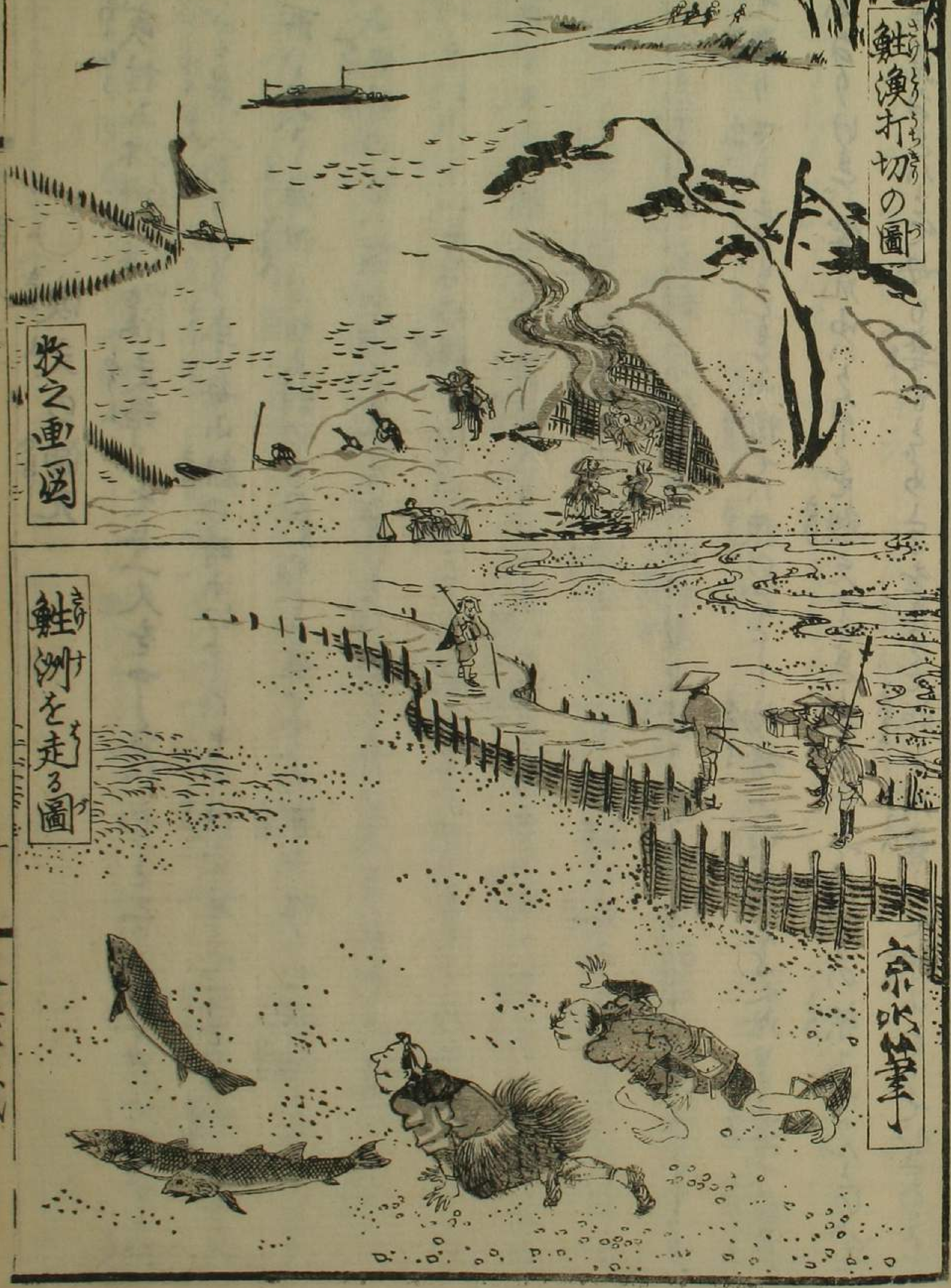
中央をながれて海に入る信濃の流は濁り越後は清し信水は犀川の濁水あるゆゑ也鮭初秋より海を出て此流に泝る蒲原郡の流は底深く河廣ゆゑ大網を用ひて鮭を捕るかの川口驛より上上田妻有のあたりにては打切といふ事をなして鮭を捕るその仕方は夏の末より事をはじめて岸根より川中へ丸木の杭を建つらね横木をそえてこれに透間なく竹簀をしからみて墻のごとくになし川の石をよせかけて力となす長さは百間二百間にいたる周圍形は川の便利にまかす船の通路はこれを除きて障りをなさず又通船の路印を建て夜の為としるすさてこれにつゞといふ物を簀下へならべ鮭の入るべきやうにしおくなり此つゞの作りやうは竹を簀にあみて末をば縛し鮭の入るべき口の方は竹の尖を作りかけて腮をなし地につく方はひらめ上は丸くし胴は彭張あり長さは五尺ばかり是鮭入らんとすれば口廣がるやうにいかにも功に作りなすものなりこれをつゞといふつゞは筒といふべきを濁り訛るなるべし田舎言語には古言のまゝをいひつたへてむかしをしのぶもあまたあれど言の清濁をとりちがへて物の名などのかはるも多し（阿加川を所にてはあがかはといふ）さて此打切を作るは幾ばくの費ある事ゆゑ漁師ども語らひあはせてなすことなり打切なる岸の傍に假に小屋をつくりて漁師ども昼夜こゝにありて夜も寐ずして鮭のかゝるを待つ七月より此業をなしそめて十二月寒明まで一連のものかはるがはる此小屋にありて鮭をとる此打切は川口を一番としてかくて水上へ十五番まであり此はいづくの持とて川にその境目ありてそれぞれ嚴重なり○さて鮭は川下より流に泝て打切にいたり船のかよふべき所は流れも打切にせかれて小滝をなすゆゑ滝にのぼるをいとふにや大かたは打切のよどみにいたりかの垣にせまり潜るべき所やあるとてかしこをさがす様つゞを見なる所にいたりくゞりいでんとしてつゞに入ればそこあるゆゑいでんとすれども口に尖りの腮ありて出る事あたはず○さて小屋にあるものはかゝりつらんとおもふほどをはかりまちゐたるとき舟をのりいだし（大木を二ツにわりてくりぬきて舟にしたるものなり○瀬の浅き所は舟を用ひず）

雪下る寒夜にも銭の為にそのさむさをもいとはず赤裸になりて水に飛入りつゞきたる‖鮭あれバつゞのまゝ舟に入るさけをいだきて大鮭ハ三尺あまりなるあるものゝ鰭狂ふゆゑ魚扠といふものゝ頭を一打うてバ立地死するに奇なるかなハ此魚扠といふもの馬の爪をきりたる椎にあらざれバ死せず私につくりたるつちにてハいかに打ても外れず又たまたま頭に打たる所もありと漁夫がいへり
鮭ある所にてハいづくにても此つちを用ふとぞ馬の爪きりたるつちとぞ
‖しかれども助買とて鮭の仲買するもの此小屋にきたりてさけをかひそうらふ

○搔網

かきあみとハ攫網なり鮭を攫ひ捕るをいふその攫ひ網の作りやうハ又ある木の枝を曲げあつめて飯櫃なりに作りこれに網の袋をつけ長き柄ありてそれをふなりとそ岸の阻なる所ハ鮭岸につきてのぼるものゆゑ岸に身を置ほどりの架をかまへてこれに居て腰に魚扠をさし鮭を搔探りてすくひとるなり

岸の絶壁なる所ハ木の根に藤縄をくゝりて架を釣りこれに居て搔網をもるも稀にあり幾尋ともなき深淵の上にこのかけをつりて身を置一條の縄に命をつなぎてかくその業をなせる事怖しともおそろしきハ此事にあるとなるゆゑなるべし


鮭漁打切の圖
牧之画図
鮭洲を走る圖
京水筆

絶壁擢網の圖

○漁夫の溺死

或村に（不祥の事ゆゑつまびらかにいはず）夫婦して母一人をやしなひ五ツと三ツになる男女の子を持たる農人ありけり年毎に鮭の時にいたればその漁をなして生業の助とせり此所はすべて岸阻なるゆゑ村のものおの〳〵岸ぶちの架を作りて撈網をおろせるに絶壁の所は架を作るものもなかりしが鮭もよくあつまるゆゑかの男こゝに架をつりおろし一すぢの縄を命の綱として鮭をとりけりさて十月の頃にいたり雪降る日には鮭も多く獲易きものゆゑ一日降る雪をも厭ず蓑笠に身をかためて朝より架にありてさけをとり番にとりかゆる時は番にも縄をつけおけるをかの人まづ架を釣る綱に縋りて絶壁を登りさてふごを引あぐるつなにすがりて登り下りするもこれに慣ては猿のごとし物喰ふ時ものぼるに此日も暮て雪荒にありければ雪荒にはかへつて鮭えやすきがゆゑにふたゝびの架にゆかんといふを雪荒なればとて母も妻もとゞむるをきかずして炬を用意して架にありてかゞりあかしを

せしにはたしてさけあまたえしゆゑ鵜飼の謡曲にうたふごとく罪も報も後の世も忘れはてゝおもしろくや時をぞうつしける○かくてその妻は母も即寝し子どもも寝かしければこの雪あれに夫はさこそ凍え玉ふらめ行もむかへてつゝ飯らんと蓑にこの帽子をかぶり松明をてらし外に二本を用意して腰にさしかしこにいたり松明をあげてさしのぞき遥下にある夫にこゑかけいかにさむからん初夜もいつかすぎつらんさぞやうゑて飢り玉へ飯ももてくりして酒ももとめ置たりいざあがり玉へたいまつもあるべし温石も入るやうにありしぞそれも持来れりといふも西北の雪荒にてよくもきこえず稍こゑをあげていへば夫あまりをきゝつけよろこべよ鮭はあまたとりたるぞあれはうちよりてうまき酒をのむべし今もこし捕てみられそちらはさきへかへれといはゞ松明はこゝにおかんとて燈したるまゝ架をつりとめて綱をくゝしたる樹のまたにさしおきて別の松明に火をうつして立かへりぬこれぞ夫婦が一世の別れなりける○さるほどに妻は家に

かくて炉に火を焼てあたゝむるものくはせんとまちかねて待居たりし
に時うつれども皈りきたらざればまちわびてはしの所にいでゝ見しにはしのた
えたるなれば驚きて持たるたいまつをかざして下を見るにひかりもとゞかず
夫のゆくへしれざればこのはしのきりより架の下をたづね
ゆかんとおもひしが心をしづめて松明をふりてらし登りし跡の雪に
あしやとわたりをみればさいせん木のまへにさしおきたる炬もえおちて
ありし事に心つきて持たる松明ふゞき猶さかりなれば架をてらしたる命
のつな焼残りてありしを見るよりむねせまりいまゝでに外れおちて綱を
きれて架はおちて夫ハ深渕に沈みたるにそひなしいかに泳をしりたりとも闇
夜の早瀬におちて手足凍え助り玉ふべき便ハあらじこはいかにせんと姑に
いひつけたりしと涙を雫にふらせて哭けるが我もともにと松明を川へ投入れ身
を投んとしけるが又おもへらく我があとハ老たる母と稚き子どもら誰

養ふものなく手をひかれて路上に立玉ふらん死ぬるにも死なれざる身とハ成りける
なかれし玉へこがつまと雪にひれふしなげけるにまがりつきこゑをあげてなく
哭にさけびかくてもあるべきならねバなく〳〵焼残りたる綱をしるしに持暗き夜
にたいまつもなく雪荒に吹まくれ涙もこほるばかりなく〳〵立かへりしが夫が
死骸さへ見えざりしと其所に近き邊りの友人が此頃の事とてさきのとし物
がたりせり

○総滝

総滝とハ新潟の湊より四十余里の川上千隈川のほとり割野村にちかき所
の流にあり信濃の丹波島より新潟までを流る間に流の滝をなすハこゝのを
かぎりその総滝とハ川をへだてゝおよそ百間ちかくもあるべきに大なる岩石竜の臥
たるがごとく水中にあるゆゑにかゝる水これに激して滝をなせりゆゑに舩
ハこれを避て激浪にのがれて猶豫なく漁師ども假に桟橋を架わたし岸に

ちかき岩の上の雪をかりのぞきてそこに居てかの擢綱をかたくさまで命の憑なれや
かのく己が腰に縄をつけとまを岩の尖りたる所に縛しかくてそこに往来する
所は岩に足のかゝるべき所をところどころに作り岩にとりつきて登り下りをなせし者
一あしを過つ時は身を粉に砕きて滝におちいるなりその危きこといはん方なし
余前年江戸に在し時右の事を先の山東翁にかたりしに翁曰世路の灘
は総滝よりも危からん世は足もとをよく見て渡るべき所やとて笑へり格言なりと
耳にとゞまりしが今偶然おもひいでゝこゝに[illegible]しるせり

○鮭漁の類術

○當川 三角なる網をもてとるをいふ ○追ひ川 水中に杭をたてあみをはり其内へ水をうちてさけをおひこむ ○四ツ手網 他国におなじ
○金鍵 水中のさけをかぎにかけてとる その手わざまた奇く妙なり ○流し網 網をさしあとゝもにながれ網の長さ二百けんあまりなるもあり
○簎突 水中のさけを見定めしやすやすとつきとる一ツものがさず その手わざ又奇なり妙なり ○その外あまたあり
といへども詳に解んは駁雑ければその網をもらせり

○鮭の洲走り

さけのすばしりは雪前に河原などにあるところかまへあみにせまれる人にも追
はるゝときは水を飛離れて河原にのぼり網ある所をこえて水にとび入りて
あとを遁るゝ此時は大鮭さきにたちて水をはなるゝこと尺よりぬける小鮭など
右に随ひてのぼり河原をはしる事四五間にすぎざれども箭のごとくして人
の足もおよびがたしさきにはしる大鮭もし物にさはりて横に倒るゝ時はあとより
はしりくる鮭もおなじくころびてふたゝびおきず人の捕るを俟がごとしかゝるをり
して手も濡さずに二三頭のさけをうることありかれは足無して地をはしり倒れて
ふたゝび起ざるなど魚族中比ふべきものなきは奇魚といふべし

○垂氷

前年牧之江戸に旅宿の頃文墨の諸名家に謁して書画を乞ひし時前の
山東庵の主は交情厚くありてしばしば訪ひしに京山翁當時はいまだ若年な

りしがある時雪の詩につけて京山翁にいはく今年正月友人らと梅見にゆきし
くるさき青楼にのぼりその暁雨ふりいでしゆゑとゞまりにけるゆゑ青楼を出て
日本堤にさしかゝりしに堤の下に柳二三株ありその柳にかゝりたる雨垂氷と
なりて一二寸づゝ枝毎にひしとさがりたるが青柳の糸に白玉をつらぬきたる如くなる
さに旭のかゞやきたるハえもいはれざる好景なりしゆゑ堤の茶店にやすらひしばらく
ひとしくながめつゝおのゝゝ詩を作りし事ありきこれハ余寒の暁に雨のこぼりしを
たる気運の機工を得てかゝる奇景をみせたるなりとて珍しがりてかたりし暖地
にてハめづらしくもあるべけれど我国の垂氷に比すれバ氷柿の一屁と心におもひし
とおもひしゆゑありし○そも〳〵我国の垂氷をいはんに他ハ姑く舎しまづ我が
家の氷柱をいはん表間口九間の屋根の簷に初春の頃の氷柱幾條もある
びさがりたるその長短ハひとしからず然ども長きハ六七尺もさがりたるが根の太さハ
二尺めぐりにひとしきもあり水晶をもて簾子をかけたるやうなれど我国
の人ハ稚きより目なれてめづらしからぬ垂氷を吟咏に入るものなし
右のつらゝ明りにさはるゆゑ朝毎に木鋤にて打おとす又家峯の谷にな
りたる所を俚言にどぶといふどぶハ春解るや積の雪のきえてしたりを落すに流
るゆゑつらゝハ簷よりも大さ下にさがりたる所ハ二丈もさがる事あり次第にふ
とりて大になるも物にさはらぬ所ハおそれハなきもこれを打砕く時ハ大力の男杭
などにて志てかに打てせめてをさおちてくだけたる四五尺なるを童らが打よりて
手遊の雪舟にのせて引きありき遊ぶもありこれらハ我家の氷柱にて珍らし
からぬ宮寺のつらゝハ猶大なり又山中のつらゝハ里地に比しがたし

○笈掛岩の垂氷

我が住む塩沢の西三里余に清水村といふあり此村持の山に笈掛岩といふ在
高さ十丈あまり横二十五間あり下に谷川あり登り川といふその形ち屏風を
ひらきたてたるがごとし岩の頂き反り伏して川に覆ひたる下ハ四五十

人坐して狭かるねはどよく此様あるがごとし我が上越後にて名をよぶ奇岩の
ある中にてもその一ツ也笈掛岩の氷柱こそ我が国の人も目をおどろかす
ものなり そのつらゝあまた垂下りたるなかにハ長さハ十丈あまり太さハ二三抱
もあるべし垂たる形状ハ蠟燭のならべたるやうなるなど里地のつらゝとはちがひ屈
曲種々のかたちをなして水晶にて工に作りなしたるがごとく玲瓏として透徹
るが暾の暉るハものに比ふべきなしと此清水村の里正阿部翁のものがたりに
てきゝぬ右のつらゝは我をもはじめつらゝはめづらしからねば強て見にゆく人なし
此清水村の阿部翁ハむかし世に聞えたる阿部右衛門の尉が子孫也世々清水越
の関守なりしとぞ此に長尾伊賀守の城跡あり

○滝の氷柱

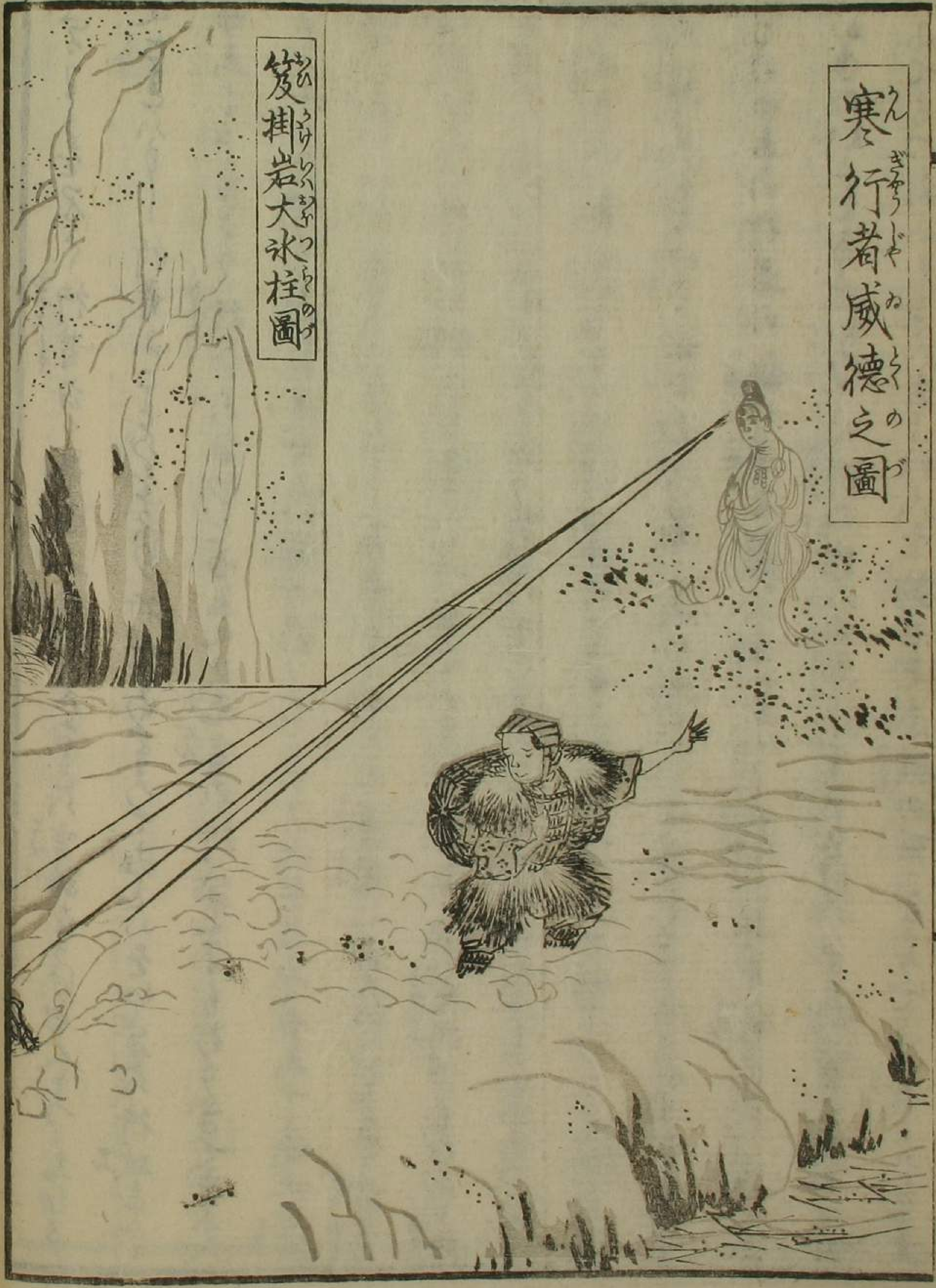
我が上越後ハ山岳つらなりたれバ滝多し滝ある所に夏木の大樹ありて春にいたり
枝につもりし雪まづとけて葉をいださぬ木の森をなしたるに滝の水烟枝に
潤ひしが津となり氷柱となりて玉簾をかけ周したるやうなるハことにも又
たぐふべきものなしさてまたその滝にも走る水氷柱となり玉簾の内に滝
をおとせしありさま四辺ハ亂瑶細玉の雪中にかの玉を出といふ崑山もかくやと
おもはるゝかゝる奇景も猟師樵夫のやうなる人稀にこれを暖国の人にみせなバ
いかにめづらしとおもはん 牧之拘崎より妻有の庄へ山越したる時目前に
みたる所也

○雪中の寒行者

我が家に江戸に二とせ居たる僕ありかれがかたりしに江戸に寒念佛と
て寒行をする道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴が森千住にいたり刑
死の回向をなすそのさまハ股引草鞋にてあるて身に着てつとむるなり又
寒中裸参りといふあり家作にかゝはるすべての職人の若人らがするなるなり
そのさまハ常より長く作りたる挑灯に日参などの文字をふとくかきし

さるを持裸になりて鐃をふりつゝとくきしきりにかいものひくにちらざる所の神
佛へまゐるまゐらんとする時ハかならず水を浴ぶ寒中の夜ハ職人も西東へ
はせありくときゝて我国の寒行ハ事ハことに似てその行ハさるものゝ異
之我国の寒中ハ所として雪ならざるハなく寒氣のはげしきさまハ前にいへるがご
としその雪をふみて毎夜寒念佛又ハ寒大神まゐりとて寒中一七日或ひハ
三七日心ゝに日をかぎりてかのまゝに志を神佛へまうづおほくハ農人の若人ら商
家のめしつかひもありひるハ業をなして夜中にまうづる之晝のいとまをのあひく
日に三度づゝ水をあぶ獨あぶるハ心ゝ之禁じて身を拭ふ事をせずぬれてゐるまゝ
にて衣服を着し坐するにハ米稿の穂の方をくゝしたるを扇のかたちにひらき
てこれに坐す此を七五三のとろとぞかりそめにも常のごとく衣ハ居るぞこの由ゑに此東称なる
縞ハ帯にまとひてまるてぞまた行の中ハ无言にて一言もいはず又母のかの妻さ
りとも女の手より物をとらず精進潔斎ハ勿論之他の人もかまはず腰にさをさ

さるところをえらく行者なる事をしりむごんなれば言語をかけず人とつゝしむなり
之ことハもし行者にことばをかけ行者あやまりてものいへば行破れたる
由ゑなれバはじめより行をするものも由之又無言の行ハせざるもありさて夜に入
れバ千垢離をとり百度目に一遍づゝかしらより水をあぶる由ゑ十遍水を浴
身をのごハずきるものをきて雪ふるときも蓑笠之あるひハいたゞく雪笠
ゆもいとふ事なく鉦うちならしつゝゆくてまでゆハいかるゝぞ同行のものある故
そのかどにいたりて鉦をならせバ同行も家にありてかの鉦をうちあはせるとし
て出きたる家に入らざるものハこの行者女に由ゑあれバ身のけがれとして川に入り
又ハ井戸をたのみて水をあぶる事まへのごとくして身をきよめさてまゐるなり
この由ゑに行者の鉦の音をきけバ女ハまくべて門へハいでず道にあへバ遠くに
かたのかとをきゝてかくる之行の内人の死したるをきけバたとひ二里三里ある所
にてもつ行にまゐる人志らぬ人を論ぜず志願の所にまうでゝ飯るさるなど其


寒行者威德之圖

笈掛岩大氷柱圖

家にいたりねんごろに回向せられしも行の一ツとせざるゆゑに不幸ありて
日のうちぬいへまでハ行者のきたるをまちうくるものなれバいかにも清くして
待ツ寒念佛寒大神まゐりの苦行あらまし件のごとくなれバ他国ハしら
ず江戸の寒念佛裸まゐりに比ぶれバおなじことなれど異なる苦行をなすもゆゑに
やその利益の灼然事を次にしるしつつ苦行して祈れバいづれの神佛も感
應ある事を童蒙に示すも

○寒行の威徳

近來の事なりき我が住塩澤より十町あまり西南にあたりて田中村といふ
あり此村に右の寒行をする者ありけりある日米俵を脊負ひて五六町へだ
てたる中村といふへゆくその道ハ三国海道なれバ人あしも繁しきゆゑ雪道ハ
人の踏かためたる跡のみをあゆむゆゑいかなる廣き所も道ハ一條にて其外
をふめバ腰をこえて雪にふみ入るゆゑ重荷など持たるハたとへ武

家なりとも一足踏退て人をのくべき道を譲るが雪国の習ひなりかの田中の者一人
の武士にゆきあひ重荷なればもとより一足ふみのきたるに武士ハ声を
あらゝげ脇よれといふ今ひと足ふみのけバ重荷ゆゑころびて雪におち入らんと
おもふゆゑいなみせんとためらひしを無礼のものなりと肩をつきたるゆゑ俵を脊負て
いかでたまるべき雪の中へよこさまに轉び倒れしに武士も又人に投られし如く
倒れけれバ田中の者ハ早く起て后も見ずしていそぎさりけりかゝるあとへおなじ
田中の者ちかくに来り武士の雪中に倒れ居て起もやらざるを不審立よりてみるに
ぞ病平なりといへバ武士ハ起るべきこともなくしてからうじてよそよといふにその面色ハつねなら
ねど病人ともみえざればいざとて手を採り引起さんとするに手をのばさず抱えお
こさんとすれどもおきず摘力のかぎりおこさんとすれども重き事大石の如く
にて身を動さず二人ハ不思議と驚怖るを見て武士さらぐの事ありしが五体
をくるしく動く事ならずとて田中のものこの武士が米俵を脊負ひしものと

いひしをきゝて心におぼえあればさてハと心づきてしかるぞ行者の罰ならんと
行者ハあらましをかたりきかせしれもかれもなにゆゑにてある中村へゆくものにかの行
者をたのミつれきてたのミ玉へこれよりハ程ちかしまち玉へとてまちあはせて行者
をつれきたりければ武士ハ手をすりてゆるし玉へといふに行者ハいかりたる色
もなくなにとなくいひつゝ衣服を脱てかたへの水揚にかけ赤裸になりて水を浴ること
まゐりたる方をふしをがミて武士の手をとりて引起しければなにのくるしみもなく
きあがりいつゆも恥るきぬそて礼をのべて立さりけるとぞ常に我が家に来る
田中のものがかたりき

○雪中の幽霊

我が隣駅関といふ宿につゞきて関山といふ村あり此村より魚野川を渡る舟
き橋あり流れ急なれバ僅の出水にも橋をながすゆゑ仮に造りたる橋なれ
ど川幅ひろけれバさしもながゝらず雪の頃ハ両のはしの橋の雪を掃て途を作れ
ども一夜の内に三尺も積る事もあるゆゑ日毎にもいくたびも掃橋幅の
狭きに雪のつもりたる上を通るなれバ渡り慣たるものもあやまち過て川におち入り
溺死するものも間あり○さて此関山村のかたはらに独り草庵を結びて
住む源教といふ念仏の道心坊ありけり年ハ六十あまりの
法師なるが無学なれどもその行ひハ碩僧にもをさく劣ざる僧なれバ年
毎に寒念仏の行をつとめ無言ハせざれども夜毎に念仏して鉦打ならし
ものにまゐりしあくてさ二夜に一度ハかの橋に立て年頃へおぼれしものゝ回
向をなしけるに今夜ハ満願とてかの橋にもいたりて殊更にねんごろに回向をなし
鉦うちならして念仏しけるに皎々たる月遽然に曇りて朦朧となりていぶ
かしとおもひしに水中より青き火閃々ともえあがりければこハ亡者の陰火なる
らんと目を閉てかねうちならしこゑ高く念仏して目をひらきしに橋の上二間を
へだちて年齢三十あまりとみゆる女白くあをざめたる貌に黒髪をさばけ

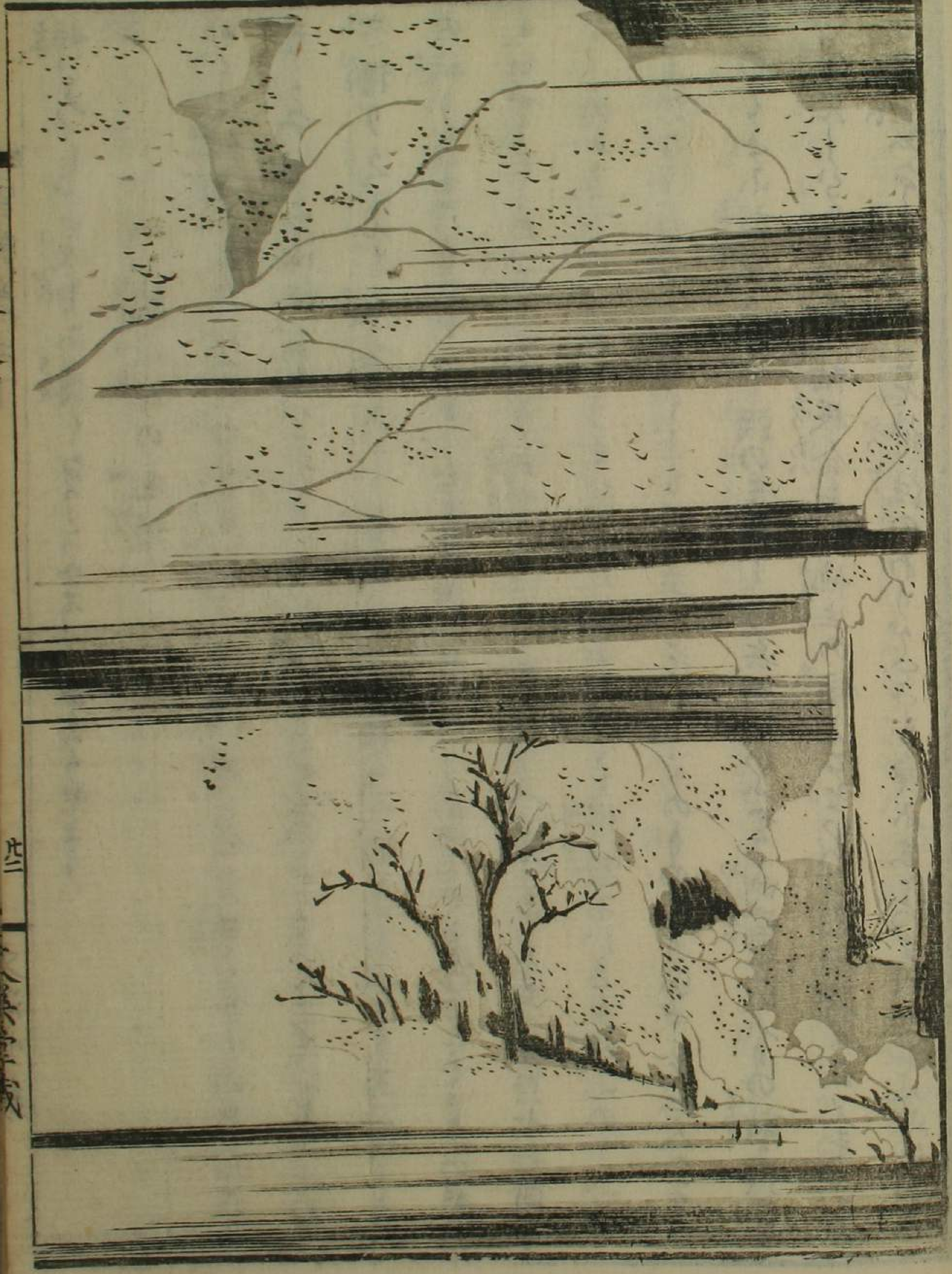
文溪堂蔵

今水より出て来りとおもふばかり濡たる袖をかきあはせて立り常人ならバ呼とひへ
て逃べきにさハなくてその方に身を對てつくづくと見るに斯闇しかりしにかゝる
ものゝありありと見ゆるもたゞ人ならじと猶よく見れバ体ハ透徹やうにてところどころ
ありなしも幽にみえ腰より下ハありともなしともおぼろげなれバこれぞ幽霊ならめと
志きりに念佛しければ移歩もなくまへにすゝみきたり細微なる声して言やう
わらハ古志郡何村（村名ハもらす）の菊とよぶものゝ夫も子も冥途にさきだちて獨り跡に
のこりかなしさに烟りさへ立かねけれバこれより五十嵐村に由縁の者あるゆゑ
助けをたのまんとてこの橋をわたりかゝりあやまちて水に入り溺死たるもの也今夜ハ四
十九日の待夜なれど世にありし時ハ誰ありて一掬の水だに手向る人
なしさるをおん僧たまたま來かゝりて回向ありつる功徳によりてありがたく佛果
をえべけれども頭の黒髪が障りとなりて閻浮に迷ふあさましさよ此上の願ひハ
此黒かみを剃おろして玉ハりなバ悲哉とて白き袖をあてゝなげくと

泣けり源教いふやうそハいとやすき事なれどこゝにハ剃べき物もなけれバ
あくる夜わが住む関山の庵へきたりなバ望をかなへてやらんといひければさも
うれしげにうなづくと見えしが烟りのごとく消うせ月ハ皎々として雪を照り
○さるほどに源教ハかへりにけり朝日人をたのみて旧来親しき同ド村の縁
屋七兵衛をまねき昨夜かうかうの事ありしとお菊が幽霊の事をこまかに語り
お菊が亡魂今夜かならずきたるべしかゝる事ハ佛に疎き人々にもしらしめて
教化の便ともなすべくいかにもたしかに見とゞけたまへ証人なければ人々
空言とおもふらん和殿ハ正直の聞えある人なれバ幽霊の証人にたのむなりと
も人の為といふに七兵衛も此法師とかねてねんごろにてしかも念佛の信着な
れバ打うなづき御坊のことをおもへバいかで固辞申さん火ともすころに來べし
何方にも知れぬやう隠しおくべし見とゞけ申さんさあれバよ佛壇の下こそよきかくし所
なれバとて人にかくれ玉ふなかれといへバ幽霊をみんとて村の若人らが來べ

まぞ心えたるハとて立皈りぬ
○斯てその黄昏にいたり源教ハ常より心して佛に供養しそこら清らかに
なし経を誦し居たり七兵衛もやきたりぬ誦しをハりて七兵衛に物などくはせ
さて日もくれけれバ佛壇の下の戸棚にかくれをらせ覗くべき節孔もありさて
佛のともし火も家のもさざと幽になし佛のまへに新薦をしきて幽霊を居
らする所とし入り口の戸をもさしあけかき研たてたる剃刀二てうを用意
し今やおそしと幽霊を待居たり此夜ハしかも雪ふりてもさしあけかきたる
戸口よりもふりこむ風にあかしもきえんとする故戸をさし炉のそばにあり
て戸棚の七兵衛にいふやう。蒲團ハしきかきたりそこにありて眠り玉ふな。いか
できることせん幽霊をえんとかまへバ心に念佛するのミ御坊こそくせをいだしてふ禄
こぎ玉ふらめ。吁。音たてし玄づかにいへ幽霊をみるともかまへて音をたて玉ふな。
とのひつ手作とて人にもらひたる烟草のあらく剋たるもせず吸あきて呻に会

佛を噛ませ頷ハ抚まハしちが鬚をぬきて居たり雪ハ雪簾にあたりてさらさらと
音のふのミ四隣なけれバ寂として声なく世時もうつりけり○さて幽霊ハ影も
みえざ源教ハ炉に温りて睡眠をもよほし居眠りしつ終に倒ねんとして目を
ひらきしにかの菊が幽霊何時か來りて佛に對ひまうけたる新薦の上に坐り頭を
低てねむりさまなが の源教も戦慄せしが心をしづめてよくこれをまもりつまとのこに幽
霊ハさなくにことなるをいだきだきは昨夜えたるにかはらぞ源教手をそそぎ盥り
水をくみとり剃刀をもちて立よりつまバ打としてる髪つかのなかりぬまで
ありきまで雪なるのりをまもりしにかなしもなし心にハかのこのまかの髪の毛
をのこしとどめし後のためしとせむやなど心して剃刀をもとかせたるにそりかけも
髪の毛糸をつけて引がごとくなれバ懐に入る女なれバ髪の毛を惜むかのんと毛
を指にかくとき剃りしに自然にところに入りて手にとどまるぞとりくして剃り
をハりまづもとしの毛ハせうせくとりとどめつ幽霊ハ白く痩たる掌を合せ佛を



雪中幽霊之圖

拝みつゝをぐき次第に薄くなるとつひにきえうせたり

○関山村の毛塚

かくて絆屋七兵衛かくれゐたる戸棚よりはひ出てさても怖しきものを見たる事かないかに法師なれバとてよくぞ剃刀をあて玉ひたる所存さへおそろしかりき独りならんも気味わるし今夜ハこゝに宿らん何にもせよ玉へ侍し人の皈りしハ用なし是ハ玉へ后の証しにせんやとてとりたりの髪の毛をすくしのとしまきて幽霊も心ありてのとしつらんとてみせけれバ七兵衛もさしのぞきて手にもとらぞ法師ハ紙につゝみて佛壇におき夕間にのこ玉ひし酒ものこりあり肴ハなくとものこ玉へとていまさのをとりいだして二人ながら炉のもとに胡坐かきて酒のみながら七兵衛がいふやう幽霊といふもの話にハきゝつるがみしハはじめてと袖振合も他生の縁とこそいへ今夜ハいづこにか迷ひさんも本意なし今夜こそ佛法のありがたさも身にしみつれバおもへバ此ゆゑあり

ゆて百万遍を申してお菊が佛果のいのりをなせん源教それよ切徳なからん古志郡のお菊がいかりを見とゞけたりと人々にかたり玉へ愚僧も見とゞけたるを証人として幽霊をかたりて教化のたよりにせんもむかしもかゝることありしと砂石集にみえしかるなど人にきかせるをいかげにおぼえて一ッ二ッかたりきかせなどして夜もふけゝれバ一ッの夜具をふたりしてかづきうちふしけり

○さてあけの日七兵衛源教を伴ひて家に皈り四隣の人をあつめてお菊が幽霊のことをかたりけれバ源教懐よりかの髪の毛をとりいだしてみせけれバ人々奇異のおもひをなしぬさて七兵衛百万遍の事をいひしにあつまりし者どもそれこそよき善行なれとおもひおもひに玉へ茶の子ハこなたよりもちゆかん御坊ハ茶の用意をし玉へ数珠ハ庵にハなかりきとてもおてらのを借てもちゆかん猶人々をもさそひあはせんといふ七兵衛が妻もかたへにありしが夫にむかひとてものことに餅をつきてまゐらせんといふもよからんとて儀式そのまゝ

雪譜巻之下

文渓堂蔵

りしをなしけり○かくてその夜源教が草庵に人々あつまりおしこりにあひて念佛申けれバなか〳〵ににぎはしき佛事となりけり此事かしこに傳へ聞えて話柄としけるがこゝろざしあるもの〳〵いふやう源教がもちしかの髪の毛を瘞め石塔を建て供養せバお菊が幽魂黄泉地のかげにもよろこびなんといひ出しおなじ心の人あまたありてそのことゝのひ終に石塔を建んとする時にいたりて源教いふやうかゝる事の導師せんハ我がおよぶ所にあらず是最上山関興寺の上人を招請ありしといふ人々さらバとてかしこにいたり事のよしをつげてお菊が戒名をもらひお菊が溺死たる橋の傍に髪の毛を埋め石塔を建る事すべて人を葬るが如くしてみなあつまりてねんごろに佛事を營みしにかの縁八七兵衛ハ此事より發心して后に出家しけるとぞこれハひとむかしまへのことなりける関山の毛塚とて今に残れり

○雪中鹿を追ふ

他国の人越後ハすべて大雪の国とおもふめれどさにあらずまへにもいへる如く海濱に近き所ハ雪浅し雪ふかきハ奥沼頸城古志の三郡或ハ苅羽三嶋の二郡に所によりて深浅あり蒲原ハ大郡ゆゑ雪薄き所あれども東南ハ奥羽に隣りて高嶺つらなるゆゑ地勢によりてハ雪深き所あり雪深き所ハ雪中牛馬を駆ざいんとするまづ人ハ雪に便利のそりといふものを用ゐれども牛馬にハ用をなさゞる事ありいぞし雪中にてハ牛馬を進バ首のあたりまで雪にうづまりてまよふ事ありざるゆゑおよそ十月より歳を越えて四月のそびまでハむなしくやしなひおくのみこゝにて暖国にハなき難儀の一ツとぞきこえし獣ハまへにもいへるごとく初雪をしりて山つゞきに雪浅き国へ去るなれども行后れて雪にうもるゝもあまたありて是を狩る事あり熊のことハ上巻にいへり野猪ハ猛き者ゆゑ雪ふかくとも得やすからず鹿羚羊などハ弱きものゆゑ雪中にハ得やすし鹿ハことさら高脛なるゆゑ雪にふかくうもるゝ故人よりハおそきにも似たり鹿ハ深山をこのまぞおもわるゝハ端山に居るものなればとて物に慣

されバその妙あり山猟に慣たる者ハ雪の足跡を見てその獣をしりまたここまでハ今朝のあしあとこれハ今きしあとゝその時をもしる也三国嶺より北へつゞく二居の人はなしけるハ鹿おひしたるをきゝしにいざ鹿おひにゆかんとてさそひあはせおのおの雪を漕ぐべき（ふかき雪をゆくを里ことばにこぐといふ）やなどに身をかため山刀をさし鉄炮手鎗又棒など持て山に入りかの足跡をたづねあとに随ひゆくほどに鹿をみるがさい人をみて逃んとすれども人のそしるにおよばず鹿ハ深田をゆくがごとく終にハ追つかれまへうしろあるひハ剛勇の人などハ角をとりてねぢ倒山刀にて刺殺もありとぞ是らハ暖国にハなき事なるべし

○泊り山の大猫

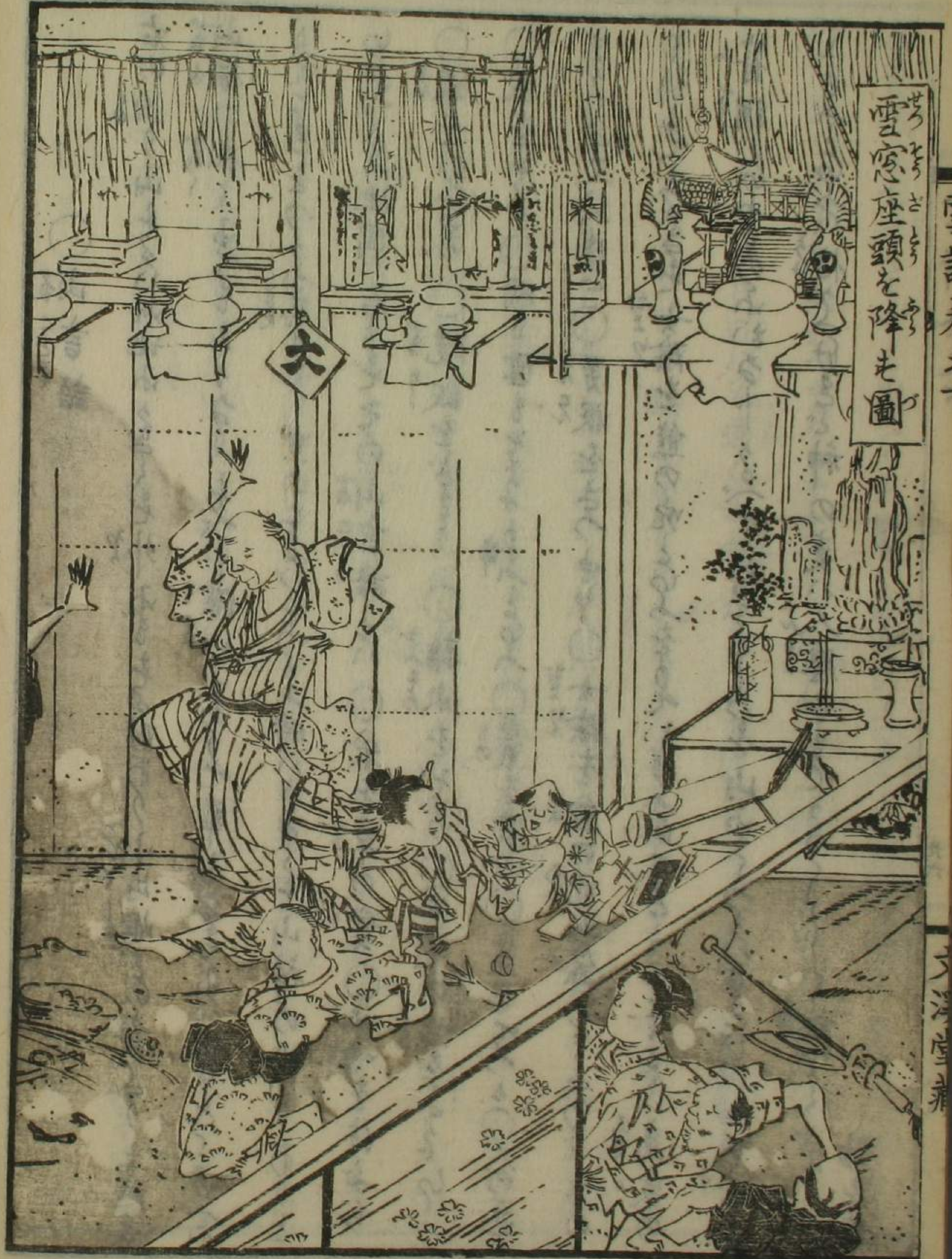
我が隣駅関にちかき飯士山に続く東に阿弥陀峯とて樵する山あり村々持分の定あり二月にいたり雪の降止たる頃農夫ら此山に樵せんとて語らひあはせ連日の食物を用意しかの山に入り所を見立て假に小屋をつくりこゝを寝所とし

毎日こゝかしこの木を心のまゝに伐とりて薪につくり小屋のかたはらにおほく積おき心に足るほどになりぬれバそのまゝに積おきて家に皈ることを泊り山といふ（山にとまりゐて事をなすゆゑ也）さて夏秋にいたれバ積おきたる薪も乾たるゆゑ牛馬を駆ひて薪を家に運びて用にあつる也雪ふかき所ハ雪中にハ山に入りて樵する事ならざるゆゑの所為なり我国雪の為に苦心するの一ツ也右にいふあたりにハ水なく谷川あれども山よりハ数丈の下をながるゝ翼なければ汲ことかなはずここに年歴たる藤蔓の大木にまとひたるが谷川へ垂下りたるあり泊り山して水汲もの樽を脊にくゝし負ひ此ふぢづるをたよりとして谷川へくだり水をくみて樽の口をつめて脊におひふたゝびふぢづるに縋りてのぼる雲機をのぼるさまのごとく山をするもの此ふぢづるなけれバ水をくむことならずよしや縄を用ふとも此藤の強にハおよばずこのゆゑに泊り山するものら此蔓を宝のごとく尊ぶとぞひとゝせ泊り山したるものゝかたりしハことし二月とまり山し時連のもの七人こゝにありて

木を伐りて居たりしに山々に響くほどの大声して猫の鳴しゆゑ人々おそれ
おのゝきたる小屋にあつまり手に／＼斧をもち耳をすましてきけバその声
ちかくにありときけバ又遠くに鳴とおもひしときけバちかし　あまたの猫かとおも
へバ其声ハ正しく一ッの猫なれどもかたちハさらにみせず　なきやみてのち七人の
ものおそる／＼ちかくなきたる所にいたりて見るに凍たる雪に踏入たる猫の足跡
ありて大さつ桶の丸盆ほどありしとかたりき天地の造物かゝるものなしともいふ
べからず我が友信州の人のかたりしハ同じ所の人千曲川へ夏の夜釣に行し人の
三人もをるべきほどのきりよき岩水より半いでたるありよき釣場なりとてそこに
のぼりてつりをなさんとしたりしにしばしありてその岩に手鞠ほどに光ものの
二ッ双びいできたりこハいかにとおもふうちに月の雲間をいでたるによくみれバ
岩とおもひしハおそるべき大なる蝦蟇にぞありけるひかりしものハ目なりけり此人いきたる心
地もなく何もうちすて逃げかへりしとかたりぬ

○山言語

右の泊り山ある所ハ此地にかぎらず外にもある所あり小出嶋といふあたり上越後
山根の在々にもあるなりすべて深山にありて事をなすにハ山ことばとて
里のことばをつかふ忌ことばをつかふ時ハかならず山神の祟りありと
いひつたふ他国ハしらずその山言語といふハ○米を草の実○味噌を法ぶら
○塩をかへなめ○焼飯をざわう○雑水をぞろ○天気の好をようばいて
○風をそよ○雨も雪もそよがふといふ○蓑をやち○笠をてつか○人の死を
まがつたといふ又ハへなたといふ○男根をさつたち○女陰を熊の穴此余あまたありさの
みハとてしるさず女陰を熊の穴といふをもておもふにことばの上にもいはゞ商家の
符調といふものゝおなじかるべしかゝることばを山中につかはざれバ山神の祟り
あるといふハ信がたけれど神の事ハ人慮をもてはかりがたし誣べからざる
物なるや


雪窓座頭を降る圖
大

○童の雪遊び

我があたりハしばしばいへるごとくおよそ十月より翌年の三月をなまでハ歳を越して半年ハ雪之此うちに生れ此うちに成長する者なればさまぐの雪遊ひをなす事さまぐありて暖国にハなきこと多し その中に暖国の人にハおもひもよらざるあそびありまづ雪を高く掘揚おきたる上などを童ども打よりて手あそびの木鋤にて平らにならしてふみつけ（童ども雪中にハわらぐつをはく事雪国のつね也）さて雪をあつめて土塀を作るやうによほどの囲をつくりなし その間ひハにも雪にて壁めく所をつくりこゝに入り口をひらき此内に宮めく所を作りまへに階をまうけ宮の内に神の御体ともみゆるやうにつくりものすゑこれを天神さまと称し（名びを大てく童どもつくる）筵など志きつめ物を焚所をも作るべくもみな雪にて作りたる也（雪をかためぬりを志ぬく火をたくにきえぬなり）これを雪ン堂又城ともいふ児曹右の雪ン堂の内にあつまり物など煮て神にもさゝげてあそび

よりてうちくふ又間にへだてを作りたるハとなりの家に准へさまぐの事をなしてたのしみ遊ぶあそび終ハ斯作りたるを打こぼつをもあそびとし又他の童のこしらへたるにちかくハおなじさまに作りたるを城をおとすなどいひてうちくるふもありそのさまにおかしくもありおのれ牧之も童のころハかゝるあそびの大将をもせしがむなしく犬馬の齢を歴て今ハ夢のやうなり

○雪に坐頭を降す

まへにもいへるごとく雪のうちに春をむかふるゆゑ歳越の日などハいづれの家にてもことさらに雪を掘て窓のあかりをとりほりたる雪も年越の事しげきにまぎれて取除をもなさず掘揚の屋上よりたかき雪道歩行にたよりあしき所もありひとゝせ歳越の夜余が点をもとむる俳諧の巻を懐にし俳友鬼角子を伴ひその巻の催主のもとへいたりて巻を主に遣しければよろこびて今夜ハめでたき夜なりゆるく語り玉へとて主人の妻娵娘も打まじり

てもてなしけりさてさまぐの雑談のなかにあすのつま牧之に歳こしの
夜は鬼の来るとて江戸にて厄払ひといふものありて鬼を追ふことをおもしろく
いひたて物もらひをなせしがむかしもさることありしや鬼の来るといふ空言
も古きつたへにやと問ふ余こたへてそはおなじく持玉ふ年浪草に吾山がおほま
しはあるなりの書を見玉へといひしに鬼角子は酒にも酔たれば戯言ていふ
やう鬼のくるといふことはいづれそらごとなれん女などのあつまりをる所は鬼の好
む所也鬼のくるにこそこよひの豆まきを鬼やらひとはいふなれ俳諧の季よ
せにもみえたりといふ母のかたはらにねたる十三になる娘がよくおぼえしその鬼を
みしことありしや。みたりとも鬼にもさまぐあり青鬼赤鬼は常のこと
色の白くてやさしきを白鬼といひ黒くて肥太りたるを黒鬼といふ。おのれ江戸
に在し時厄払が鬼をかいつかみて西の海へさらりと投るをみたる事ありその
鬼は黒かりし江戸の歳越にさへ夜は鬼のありくなればこちらのとしこしにも

鬼はいくたりもありくべしあり窓よりのぞきもやせんといふもはてにおとせば
よめもむすめも空言のなかに実と口にはいへど母の左右によりつきておそれて
さなくしけりかゝるをりしも人々の座りゐたる后の方にちかきあたり窓ありて
がきびしき音ありてまどをやぶり摺あげの雪ぐわらくと崩れおちくる中に人
の降りくだりければ女はさらなり吁といひてうつぶして愕然迷ひ男はたち立あが
りておどろきけり下部らもこのおとにさゝたせよりて崩れおちくる雪にうまれ
たる人をみれば此家へも常にきたる福一といふ按摩とりの小座頭なりけり笑ひに
疵もうけずおもな撫まはし腰をさするこそ福一なりとぞさわぎたればおのれも
こらふ下部らはおちくる雪をとりのけ窓をもかりにつくろひなどそあすの妻
もろくそていふに福一鬼角どのゝ鬼のまねしたるをきゝてに鬼かといふまひて
皆さまは戯ひなせりめでたきこよひの夜に盲が窓よりおりくるはいまはしきこと
ありとかくしいでゆけとてたゝりにかゝりければあるじさまおりあひぞ福一

いゝふして窓よりおちいりしぞいとめし所ハあまたとかの福一がうちあるをつくりしあり
所ハいふぞ今夜のおめでたきを申さんとてこそなどいひてまなかのこゝろのよどふ
や揺あげの道きのふとふちがひておしもとおしくまかきしをバおやまちて轉
るが窓をもおしやぶりておち入るところをきゝてあるじハいふぞゆるし玉へと
いふ嫗も娘も口をそろへ鬼やとていそがしくおびえたり憎き盲めと腹立く
いふあるじのつまいかりをやめてあるもこよしの吉方にあたる窓をやぶりて目
のあきものゝ入りしハさいはひしきることとなりしくまとのきゝけれバ
鬼角ハかくより福一まづかりて又これをそのうちにまびしておくべしといへど
福一かしらをさしものを按ずるさまなりしがやがて鬼角にむかひ哥一首よみて
いゝきて玉ハまといふ此福一ハとしころはけきど俳諧もさま哥をもよむものなれ
まバあるじこれハおもしろしとて鬼角がかきてつるをよませてきけバそのうたに
吉方から福一といふこめくらが入りてあるじハもちつくめでたし

このうたを人々めでゝいとおもしろしときゝあるじ手をうちていさゝよろこびふかくび
盃をめぐらしけりあるじもんつきの羽織を娵にとりいださせて哥のろく
とて福一にとらせけれバ膝にのせてなでさすりあなまちの高名しつとて急ぎ
ようけてよろこびつゝめでたし歳越にきものゝきせんとて羽おりきるなりで
きせかへてちをつくりて猶よろこびけり是が吉瑞と成しか此年此家の娵初産
に男子をまうけ其ひもなくておひさき三ッのとし疱瘡もかろくして今年七
ツになりぬ福一ハかの怜悧ものなりしゆゑ今江戸にありて官にものぼりしと聞
ぬ目でたき事どもなりけり

北越雪譜初編巻之下終　全三巻大尾

画者　少年　京水百鶴